



ツチノコは存在するか

雪男やネッシーなど、その存在について物議を醸してきた生物は少なくない。いわゆるUMA（未確認動物）というやつだ。日本でもこれまで様々なUMAの存在が囁かれてきたが、中でもツチノコは代表格であろう。古くは「古事記」や「日本書紀」にその名前が登場し、昭和40～50年代になってからは、全国でツチノコ狩りが一大ブームとなった。当時の盛り上がりは、某百貨店が生け捕りに懸賞金をかけたほどである。時は過ぎ、平成の世になっても、各地でツチノコの目撃情報は続いているようだが、依然、その存在が証明されたという話は聞かない。

では、現段階において、「ツチノコなんてものは存在しない」と言い切ってしまうてよいものだろうか。論理的にいうと、答えはノーである。なぜなら、存在していても、たまたま見つかっていないだけかもし

れないからである。「どこにも存在しない」と結論付けるには、全国津々浦々、深山幽谷、人跡未踏の地まで分け入り、ツチノコがただの一匹も存在しないことを証明することが必要だ。このような「すべてのAについてBだ [(すべての) ツチノコは存在しない]」というタイプの命題は全称命題と呼ばれる。対照的に、「あるAについてBだ」という命題は特称命題と呼ばれる。論理的な意味において、特称命題の証明は、全称命題のそれよりもはるかに易

しい。なぜなら、すべてを検証せずとも一例を挙げるだけで十分だからだ。例えば、「(ある) ツチノコは存在する」を示すには、ツチノコを一匹捕獲すればよい。

全称命題と特称命題は、日常生活において、無意識にせよ、意図的にせよ、しばしば混同されがちだ。あるケースで得られた結論(特称命題)が、^{あたか}もすべてのケースにおいて成り立つか(全称命題)のごとく安易に語られてしまうのである。例えば、



自分の知っている中国人皆が宴席で老酒を浴びるように飲むからといって、中国人皆が酒に強いと決め付けるのは間違いである(実際、筆者の杭州出身の同僚はまったくの下戸だ)。偉大な記録を打ち立てたスポーツ選手が、スポーツと関係のない分野でも妙に神格化されたり、逆に犯罪行為に手を染めてしまった往年のアイ

ドルが、罪状と直接無関係なところまで叩かれたりするのも同様の例であろう。サブプライム危機においては、ハイリスクの証券化商品だけでなく、リスクが限定的であったものについても、証券化という名が付いているだけで、売りが浴びせられた。

以上の例自体は他愛のないものである。しかし、特称命題から全称命題へのすり替えは、案外、偏見というものを助長させる大きな要因に思えてならないのである。(甲斐 俊吾)